

小説・那羽都レン

挿絵・平塚まひる



悦楽のバール

Noir de plaisir

腰砕け吸血姫の快樂特訓

試し読み版

第一章	真夜中の出逢い	006
第二章	黒の吸血姫ノワール	028
第三章	吸血姫と快樂特訓	051
第四章	赤の吸血姫	121
第五章	赤く染まる黒	160
第六章	黒く染まる赤	201
第七章	心通わせて	239
後日談	二人の吸血姫の穴比べ	261




ノワール＝プリメーラ

世界に六人存在する夜魔の王の一人。凄絶なまでの美貌を持った吸血姫の少女。楚々として気品溢れる立ち居振る舞いはまるで幻想的だが案外ちょろい。



ルージュ＝プリメーラ

ノワールと同じく夜魔の王の一人。抜群のプロポーションを誇る美少女でノワールとは因縁浅からぬ関係。互いに敵対心を抱いている。



あがつまえいじ
吾妻詠司

何の変哲もないごく普通の大学生。だが、その血は常人の数十万倍の血中魔力濃度を秘めている。

Characters
登場人物紹介



第一章 真夜中の出逢い

「……………ん……………?」

深夜、ふと身体に掛かる重さを感じ、詠司はベッドの上で目を醒ました。

取りあえず身体を起こそうと力を籠めるが、腹の上に何かが乗っているらしく簡単には持ち上がらない。一体何が、と思った彼が仰向けの格好のまま首だけを曲げてそちらの方を見ると、そこにはなんと漆黒のゴシックドレスを身に纏った黒髪の少女が座って彼を見下ろしていた。

「……………え?」

思わぬ光景に夢か幻かと思った詠司は何度か瞬きをするが、どれだけ目を瞬かせても目の前に映る少女の姿は変わらなかつた。最初に見た時と変わらず、腹の上に座ったまま彼を見ている。薄いタオルケット越しに感じる体温も、彼女が現実の存在だということを表していた。

それは、凄絶な程の美貌を持つ少女だった。

腰まである髪は艶やかな黒い色をしているが、顔立ちは日本人のそれではなく欧米系で瞳も紅い。触れあつた部分から感じる体温がなければ、一流の人形師が造つた人形と間違



えても不思議ではないくらい整っている。鼻筋もスツとしていて、口も小さく可愛らしかった。

見たところ、年の頃は十五歳くらいだろうか。見た目の年齢を考えれば可愛らしいという表現の方が似合うはずなのだが、月の光に照らされた今の彼女の放つ雰囲気には美しいと称することの方が相応しく思わせる妖艶さがあつた。

(だ、誰だこの子……?)

詠司にはこんな美しい少女と知り合つた記憶はないので初対面のはずだ。こんな特徴的な相手は一度見掛けただけで深く記憶に残っていることは間違いないだろうから、記憶にない以上は初対面であると思えない。また、彼女に限らず誰かを部屋に連れ込むようなことをした覚えも当然ながらない。

もしかして酔っぱらつて人事不省のうちに……とも考えたが、昨夜は特に酒を呑んだ覚えもないので違うだろう。眠りに就くまでの間、この部屋には彼以外の人物はいなかつた。それは断言出来る。

出てきた結論は、彼女は彼が寝ている間に部屋へと侵入した不審者であるというものだった。

「あら、起こしちゃつたかしら？」

詠司が目を醒ましたことに気付いた少女は、その紅い目をぱちくりと瞬かせながら声を

上げた。とても澄んだ声で、大きな声を出したわけでも耳元で囁かれたわけでもないのにハッキリと聞こえる。少女特有の高めの声であるのに不思議と深みも感じられる、そんな声だった。魔性の魅力を孕んだその声に耳をくすぐられ、詠司は思わず背筋にぞくぞくとする感覚を覚えた。

「まあ、別にいいけど。どうせやることは変わらないし」

そう言うと、彼女は彼の身体を覆うタオルケットを引き剥がしてベッドの端に放り投げ、そのまま彼が着ているパジャマのボタンを三つ程外した。ボタンを外すことで余裕の出来た襟がめくられ、首筋が露わになる。

パジャマをはだけさせる時、華奢な指先が詠司の胸元に軽く触れてくすぐるようになぞり、そこから走った快感に彼の全身がゾクツと鳥肌を立てた。いきなり着ているものをはだけられて情事を始めるかのような展開に、彼は困惑しながらも思わず期待感がこみ上げてくるのを抑えることが出来なかった。

「な、何を……」

「ふふ。貴方の血、貰うわね」

「は？」

内心の期待を隠しながら問い掛ける詠司だったが、少女はそれに取り合うことなく自分の要求だけを告げた。予想を斜めに裏切るその回答に、彼は思わず間拔けな表情になっ

てしまふ。

囁いた彼女の口元で、異常に発達した犬歯がギラリと光る。いや、それはもはや牙と呼んだ方が正しいだろう。人間ではあり得ない程の鋭さを持ったそれは、狼などの肉食動物が持つ獲物を引き裂く武器と同じとしか思えなかった。その鋭利な牙なら詠司の皮膚など簡単に引き裂いてしまえるだろうと想像出来るが、今の彼女がしようとしていることはそうではない。

血を貰う——彼女はそう言った。その言葉が正しければ、あの牙を皮膚に突き刺して血管から血を吸い上げるつもりなのだろう。

それは、それはまるで……。

(……吸血……鬼?)

伝承やオカルトの中でのみ知るその存在の名を脳裏に思い浮かべたのと同時に、詠司の腹の上に跨またがった少女は倒れ掛かるようにその小柄な身体を、口元を彼の首の辺りへと近づけてゆく。身体が密着することで、彼は少女の身体の柔らかさを前面で感じるようになる。少女の身体から立ち昇る甘い体臭が鼻腔びこうを刺激し、詠司はこんな状況だというのに興奮のあまり勃起を免れなかった。

しかし次の瞬間、彼の首筋にチクリとした痛みが走る。反射的にそちらを見ようとすると、視界には少女の艶やかな黒髪だけが映り、痛みを覚えた場所を見ることは叶わなかつ

た。

(俺は……このまま血を吸われて殺されるのか……)

身体の中を巡る何かを吸い出されるような感覚と何故か感じる峻烈しゅんれつな快楽の中、詠司は死を覚悟し、その意識を……。

「……かはっ!!」

詠司の首筋に牙を埋めていた少女が、突然むせるような仕草を見せたかと思うと、力を失ってぐったりと彼の上にもたれ掛かった。同時に、少女が跨っている彼の腹の上辺りに何やら生温かい感触が広がる。

「……………え?」

唐突な展開に状況が呑み込めなかった詠司は、思わずポツリと呟く。しかし、それに応える声はない。彼の身体の上にいる少女はかろうじて意識はあるようだが、時折びくびくと痙攣けいれんするだけで声も上げられない様子だった。

取りあえずとばかりに、彼は少女を自分の身体の上から丁重に横に降ろすことにした。詠司からしてみれば相手は突然襲ってきた不審者以外の何者でもないのだが、見た目年下の少女を粗雑に扱うことは出来なかったのだ。

もちろん、相手が物凄い美少女だったことも理由の一つではある。

「えーと……」

— 身体の上に乗っていた少女を降ろすことでようやく身を起すことが出来た詠司は、ベッドの上に腰かけながら困った様子を見せた。

ベッドに横たえられた少女は力なく仰向けになり、その肢体を無防備に晒している。手足に力が入らないらしく、自力で立ち上がることが出来ないようだった。

横倒しになった際にドレスのスカートがまくれ上がり、少女の下半身が露わになっている。剥き出しになった太腿の透き通るような白さに、詠司は思わずごとくりと唾を呑み込む。そして、その奥に見える歳不相応の黒いレースのショーツは、ぐっしよりと濡れそぼっていた。

失禁した尿と、それ以外の体液の混ざり合った強烈な性臭に、詠司は頭がクラクラする感覚に陥る。元より可愛らしさよりも妖艶さを感じさせる少女ではあったが、今の痴態はそれを通り越して男の性的興奮を直撃してくる。

理性を手放した彼は、ふらふらと操られるように目の前に横たわる少女の肢体へと手を伸ばした。

十 十 十

窓から差し込む月明かりに少女の白い肢体が浮かび上がる。

黒いゴシックドレスとその下に隠されていた黒い下着を苦勞しながら脱がせた詠司は、目の前に横たわる少女の幻想的な裸身に圧倒されていた。小振りな胸はなだらかな曲線を描き、その頂点に固く屹立した桃色の突起が自己主張していた。ほっそりとした腹部の先にある恥丘には産毛程度しか生えておらず、秘裂を隠すものはない。

そして、細い脚の付け根にある彼女の一番大事な部分は、縦筋のみで恥ずかしげにその身を隠しながらも、こんこんと蜜液を吐き出し続けていた。幼げな秘裂とは裏腹の卑猥な有様に、詠司は自らの男根が更に固くなるのを感じた。

これがかもしも、ただ裸身を露わにしただけであれば、もしかしたら彼はその可憐さと神々しさに圧倒されて手を出すことなど出来なかつたかも知れない。それ程に僂はかなげで幻想的な裸身だつた。しかし、突起を尖らせ蜜を垂れ流す卑猥な姿に、詠司の中の最後の一線は障害としての役割を失つた。

「据すえ膳ぜん喰くわぬは——とばかりに、彼は少女に申し掛かつた。

彼女がいかなる状態に陥つたのかは彼には分からなかつたが、少なくとも全身の感覚が過剰な程鋭敏になっていることは確かだろう。彼がドレスを脱がせた時にも、彼女はわずかな衣まぬ擦すれの刺激ですら耐え切れずに何度も達してしまう程だつた。おそらく、今の少女は風が身体に当たつただけでも感じてしまうくらいの敏感状態になつてしまつているのだらう。

そんな彼女に対して、詠司は手始めにその「どうぞ摘まんでください」とばかりに尖った美味しそうな乳首を左右共に親指と中指でそつと摘まんだ。

「んひいッ!？」

途端に、彼女は絶頂した。それも、股間から潮を噴き出しての激しい絶頂だ。

仰向けのままガクガクと腰を振り乱して達する少女に詠司は思わず呆然とするが、すぐに笑みを浮かべて彼女の突起に更なる責苦を加え始めた。乳首を摘まんだ親指と中指を擦り合わせるように動かし始めたのだ。

「ひいん!? あ、あ、あ、あひいひい!？」

先程の絶頂からまだ降り切れていなかった少女は、突起に加えられた追加攻撃に為す術もなく翻弄ほんろうされて達し続けてしまう。いつそ滑稽なくらいに快樂に対する耐性がないようだった。

「ひゃ、ひゃめてえ……」

舌っ足らずな声で慈悲を懇願こんがんする少女だが、それは逆効果だった。幼げな少女の弱々しい姿に、詠司はますます興奮を煽られてしまう。

彼は左手で突起を責め続けながら、右手で弄んでいた左胸を解放すると、代わりとばかりに吸い付いた。

「ゆ、ゆるひて……こんなの無理い……。あ、あ、また来るっ!？」

小振りな胸に不似合いな程に大きくそそり立った乳首を吸われ、許しを乞いながらも激しく絶頂する少女。その愛らしくもいやらしい姿に詠司は邪悪な気持ちを誘われ、口に含んだ乳首をカリッと軽く甘噛みする。

「……………ッ!!」

効果は絶大だった。

少女は声を上げることも出来ない激しい悦楽に襲われ、ブリッジをするような体勢で痙攣する。股間からは潮ではなく先程の失禁での残尿が噴き出した。

詠司のベッドは彼女の垂れ流す様々な液体で既にびっしょりと濡れてしまっている。しかし、そんな些細なことを気にする者はこの場にはいなかった。腰を突き出して激しく達した少女は、やがて自らが垂れ流した様々な液で濡れたベッドの上に倒れ込み、荒い息を吐いた。

「……………はあ、はあ」

がくりとベッドに落ちた少女を見て、詠司は標的を上半身から下半身へと移す。

胸から白い肌の上を伝うように指を動かし、腹、へそ、恥丘と撫でてゆく。発情状態に陥った今の少女にはそんな軽く撫でる行為すら快感になるらしく、本来性感帯ではないような場所を触れられた時ですらフルフルと身を震わせている。

そしていよいよ肝心な部分への責めが来る、と身を固くした少女に肩透かしを喰らわせ

るように、詠司の指は秘裂の横を素通りして太腿の内側を撫でる。

「え？ んくつ！」

彼の手の意外な動きとそこからもたらされる優しい快感に、少女は不思議そうな声を上げた。

同時に、秘裂への責めが来ることを予期して強張^{こわば}っていた彼女の身体から、ふっと力が抜ける。

——その瞬間を見逃さず、詠司は隙ありとばかりに無防備な彼女の縦筋をなぞり上げた。「ひゃあああああ!!」

先程の肩透かしで油断していた少女は、股間から湧き上がった突然の刺激に素^す頓^{とん}狂^{きやう}な声を上げて達する。そんな彼女の姿を見て薄く笑った詠司は、更に上から下、下から上と秘裂を擦り立てる。

「あひい、んくあ、ひゃ、ひゃめ、ああああああああ」

度重なる絶頂に更に過敏になった少女は、一擦りごとに達しながら身も世もない悲痛な声を上げる。幼げな縦筋は、幾度も擦り上げられることで華開^{はなひら}き、その内に隠していた桃色の濡れそぼった秘肉を晒してしまふ。

しかし、彼はそこは後回しとばかりに別の場所へと手を伸ばす。それは秘裂の上部にある肉の莢^{まが}だった。詠司はその両端に指を添えて左右に割り開き、包皮の中に隠された宝玉

を曝け出す。

「ま、まさか……ら、らめえ！　そ、そこだけは……」

普段は隠れているその部分が露わになって空気が触れる感触に達しながら、少女は次に我が身に襲い掛かる事態を想像して戦慄する。空気が触れるだけで達してしまう程に敏感になってしまった突起をもし直接触れられたらどうなってしまうのか、圧倒的な快楽への恐怖とわずかな期待が彼女を怯えさせる。

なんとか許しを得ようと懇願するが、その返答は言葉ではなく最も敏感な突起に対する口付けという形で行われた。

「ッ!？」

乳首と同じようにそそり立った陰核いんかくに吸い付かれ、少女は再び声も出せずに達した。いや、達し続けた。

「~~~~~っ！」

陰核に詠司の唇が近づく気配だけで絶頂し、唇が触れた瞬間に絶頂し、逃げ場のない突起を舌でなぞられて絶頂し、陰核ごと空気を吸い込むように吸引されてまた絶頂した。

絶頂から降りる前に更なる絶頂へと打ち上げられ、少女は降りてくることも出来ずにひたすらにイキ続けた。特に、吸引されるともうダメだった。魂を吸い出されるような気持ちよさに、我慢するとかしないとかの次元ではなくイキまくった。

少女は強烈過ぎる快楽に反射的に腰を引いて逃げようとするが、その尻たぶを両の手でがっしりと掴まれて逃れることは叶わない。それどころか、腰を引こうとする動きすら吸引された陰核を刺激することに繋がってしまい、更に感じてしまう。それが分かっているが、少女は無意識な腰の動きを止めることが出来ない。

もはや彼女に出来るのは、詠司が満足するまでひたすらに連続絶頂を味わうことだけだった。

しばらくして満足した詠司が彼女の魅惑の突起から口を外した時、少女は既に半分意識を失った状態でぐったりと倒れ伏していた。まさしく、半死はんしはんしょうあいきどいき半生青息吐息といった有様だ。果たして、彼女は既に何度の絶頂に達しただろうか。彼も数えてはいないし、もはや達し過ぎて彼女自身も答えられないことだろう。

しかし、陵辱の終わりを告げるにはまだ早い。何故ならまだ、詠司は一度も精を吐き出すことすらしていないのだから、これで終わりに出来るはずもないし、するつもりもなかった。

詠司は着ていた寝巻きを脱ぎ捨て、その裸身を露わにする。比較的長身で程よく鍛えられたその身体は、控え目に言っても女性に好まれる体型だと言えるだろう。

しかし、特に注目すべきは彼の股間にそそり立つその男根だろう。日本人の平均的な大きさを凌駕りょうがするそれは、固く屹立きつりつして振り返っている。先端からは先走り汁が流れ、女体

を蹂躪する時を今か今かと待つように亀頭を濡らしていた。

詠司は自身の男根を右手で支え、左手で少女の脚を開かせた。連続絶頂で完全に腰が抜けているらしく、それに対する抵抗はなかった。開かれた脚の中央に、ぐしよぐしよに濡れた幼くも淫猥な秘裂がひくついているのが見える。

少女はぐつたりと力なく伏せながらも懇願するような上目遣いを向けてくるが、それはもはや彼の興奮を煽る材料にしかない。

「挿入れるぞ」

いやいやをするように首を振る少女には構わず、彼は亀頭の先端をいやらしく濡れそぼった少女の秘裂へとピトリと押し当てた。少女は恐怖の表情を浮かべながらも、その感触だけで絶頂した。

十 十 十

「ああああ……」

ぐつと腰に力を入れ、切っ先を秘口へとねじ込んでいく。

少女のそこは体格相応に狭いが、激しく濡れているため比較的スムーズに詠司のモノを受け入れた。亀頭で味わう肉を掻き分ける悦楽と、キュツと幹を締め付けられる心地良さ、

そして何よりも絶世とも言える幼げな美少女を抱いている興奮に、詠司は思わず挿入れたばかりなのに放出してしまいそうになる。

「うお……」

しかし、ここで射精してしまうのはあまりに勿体無い。もつとこの無垢な肢体を味わってから、最高の快楽の中で達したかった。そう考えて詠司が歯を食い縛って射精を堪えながら少女の奥へと侵略していると、ふと先端が何かに当たるのを感じた。

軽い弾力を感じるそのの正体は、少女が未だその身に男を受け入れたことがなかった証だ。それを悟った詠司はほんのわずかな罪悪感と、それを遥かに凌駕する無垢な少女を蹂躪する暗い興奮を感じながら、腰に体重を掛けた。

「ひっ……ぐ……」

それは決して耳には聞こえない音だった。

プツツという直に触れている肉棒の先端だけが感じられる音を聞いた直後、詠司のモノは彼女の奥までずるりと一気に入り込んでいた。いくら濡れそぼって準備が出来ていたとはいえ流石に処女膜を破られることには痛みを感じたのか、ぐったりと横たわっていた少女が呻きを上げる。

スツと整った瞳から、一筋の涙が流れた。

「く、全部入ったな」



リギリのところ、零さないようにテーブルに置き、心臓を押さえるかのように胸元に手を当てる。そのまま椅子から転げ落ちそうになるところを、詠司が掬すくい上げるように抱き上げた。

「な、これは!? まさか、今のお茶に!」

突然起こった身体の変調に心当たりがあつた彼女は、自らの身を抱き上げた詠司を睨む。この場で犯人は彼しか思い当たらなかつたためだ。

「ああ、隠し味に俺の血を少々」

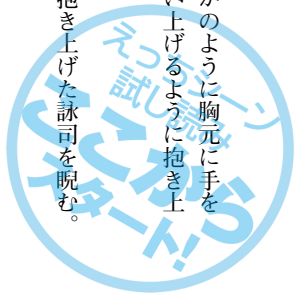
「——っ! どういうつもり!」

困惑と怒り、そして性的な興奮で顔を赤く染めるノワール。強がってはいるものの、股座では激しく蜜液が溢れて足を伝つて床へと滴り落ちていく。

紅茶に混ぜたせいで薄まつていたためかこれまでよりは影響が薄い、過剰な魔力の摂取により感じてしまった身体には力が入らず詠司を押し退けることも出来そうにない。それどころか、既に腰が抜けていて自力で立ち上がることも困難だった。

詠司はそんな抵抗出来ない彼女の身体をベッドの上へと運んだ。うつ伏せにした彼女の腹の下に丸めた布団を入れたため、尻が浮いて突き出しているようなポーズになつてしまつている。

「う〜っ!」



恥ずかしい格好に無言で睨んで抗議するノワールだが、彼はそれを無視して彼女のドレスのスカートをまくり上げた。

「やあっ!!」

白い肌とコントラストをなす黒いレースのショーツの縁に指を掛け、ゆっくりと引き剥がしてゆく。ショーツは当然のごとく秘部の辺りを中心にぐっしりと濡れそぼっている。やがて剥き出しになった彼女の染み一つない尻は、夜空に浮かぶ満月を彷彿とさせた。

「んん、触り心地いいな」

「な、撫でないでえ」

肉付きは薄いのが、その肌の感触は素晴らしかった。すべすべとした尻肌を撫で回す詠司にノワールは逃げようとするが、畏に嵌まって力が抜けてしまった身体が動かない。

しばらく彼女の尻肌の感触を愉しんだ詠司は、メインディッシュとばかりに両手を左右の尻峰に添え、割り開くように左右に引つ張る。そうすると、山脈の影に隠れていた菊の花のような楚々とした肛門が顔を覗かせる。

「い、いやああああああっ!!」

最も恥ずべき不浄の穴を曝け出され、ノワールは羞恥に悲鳴を上げた。しかし、彼女の可愛らしい尻穴を襲う試練はこれからが本番だった。詠司が息を吸って口元を彼女の肛門に近付けると……。

「フッ！」

「ひうつ?! い、息を吹き掛けないで！」

詠司が口元からフツと勢いよく空気を吹き掛けてやると、肛門はぴくんと痙攣するように反応する。ノワールがやめるように懇願するが、面白がった彼はそれを無視して何度も息を吹き掛ける。

「ひぁ! あく! うぁ!」

詠司が息を吹き掛ける度に、ぴくぴくと震える少女の肛門。尻穴を襲う何とも言えぬ感触に、彼女はうつ伏せのままベッドのシーツをギュッと握った。彼が吹くのをやめると、強張った身体から力が抜けてガクツと腰が落ちた。

「はあ……はあ……」

息を吹き掛けられただけで疲労して荒い息を吐く黒の吸血姫に、詠司は次の責めへと移ることにした。

先程は両手で割り開いていた尻たぶを、左手一本の親指と中指で押さえ付けるようにして固定する。そして、自由になった右手の指を突き出すと、彼女の肛門に押し当ててクリクリとくすぐり始めた。

「ひぁっ?! や、やめて。そんな汚いところ、触らないで」

紅茶に混ぜた詠司の血は数滴の上、ノワールが飲んだのは一口だけだ。体内に取り入れ

てしまった血液の総量としてはかなり少ない。それ故に、初日に陥つたような前後不覚な状態にはなっておらず、言葉も呂律が回らないような状態ではない。意識もハッキリしているのだが、この場合はそれが仇になっていた。ハッキリしている思考は、彼女が羞恥から逃れることを許してくれない。

不浄の穴を異性に弄られるという羞恥としてはこれ以上ないと思われる行為に、ノワールは目の前に置かれていた枕に真つ赤に染まった顔を押し付ける。それは恥ずかしさを少しでも紛らわせるための行動だったが、視界が封じられることで逆に尻穴の上で踊る詠司の指の感触を鮮明に感じてしまうことに彼女は気付かなかつた。

指が肛門の縁をなぞるように動くと、ビクンとうつ伏せになった背中が揺れる。もちろん、肛門もピクピクと震え、あたかも指を歓迎しているかのように見える。まるで、金魚が餌を食うような光景に、詠司は思わず笑ってしまった。その笑い声が聞こえたのか、ノワールは羞恥に顔を枕に押し付けたままイヤイヤをするように頭を振った。

調子に乗った彼は、尻たぶを押さえていた左手も肛門を責める方へと移す。両手の人差し指を肛門の縁のすぐ横にそれぞれ置き、穴を広げるように左右へと肉を引っ張る。そして、おっぴろげにされて口を開けた肛門から、奥の腸内を覗き込む。

「やめ。み、見ないで！ そんなところ、覗かないで！」

「恥ずかしがらなくても大丈夫、奥まで綺麗なピンク色だ」

「……っ!!」

尻穴の奥を覗き込まれるという羞恥拷問、それだけでも死にたくなる程恥ずかしかったというのに、あろうことかその体内の感想を口にされ、彼女は上げていた顔を再び枕に押し付けて声にならない悲鳴を上げながら羞恥に悶えた。

顔を枕に押し付けたせいで後ろの様子が分からないノワールは、そのせいで詠司の次の行動を避けることが出来なかった。もちろん、満足に身動きが出来ない今の彼女では、仮に見えていたとしても防げたかは分からないが。

「うひいっ!!」

突然尻穴に走った圧迫感と鈍痛、そしてわずかな官能に少女は素っ頓狂な悲鳴を上げた。思わず枕から顔を上げた彼女が後ろを見ると、詠司の右の小指が彼女の尻に隠れて見えな。先程の感触を考えれば、何をされたかは想像が付く。彼が小指を彼女の尻穴に突き入れたのだ。

「な、なにを……ゆ、ゆびっ!! んくう!! そ、そんな……お尻の穴に指を入れるなんて……あひいん!」

その状態のまま左右に指を回転させられると、巻き込まれるように腸内粘膜がよじれて摩擦感を与えられる。尻穴から湧き上がってくる奇妙な感触に、ノワールは思わず鼻に掛かったような声を上げてしまった。

不淨の穴で感じる感触が快感なはずはないと、必死にその感覚を不快感だと思い込もうとしている彼女は前の穴から蜜が垂れ流されていることには気付かなかった。それでも心のどこかでこのまま尻穴を弄られていたら大変なことになってしまおうと悟っていたのだろう。何とか責めをやめてほしいと懇願をし始める。

「お、お願い。抜いてえ……」

「ああ、分かった」

「はふ……ふあああつ?! ど、どうして?!」

尻穴から指を抜いてほしいというノワールの懇願に、詠司は素直に従って小指を彼女の尻穴から抜いた。その時の中から外に向かって擦り立てる感触に排泄にも似た悦楽を感じてしまい、彼女は思わず鼻に掛かったような声を上げてしまった。

ともかく、指を抜かれてホッと安堵するノワールだったがそれも束の間、再び指を突き入れられて嬌声を上げる。しかも、突き入れられたのは先程まで入れられていた小指よりも一段太い薬指だ。

「こうやって少しずつ太くして行って、お前の尻穴を広げるのさ」

「い、いやああ。そんなのだめえ」

詠司の残酷な宣言に吸血姫は本気で嫌悪を浮かべるが、突き入れられた指を腹の中で動かされると途端にその抵抗が弱まってしまふ。

圧迫感は相変わらず大きいが鈍痛は既に引いている。代わりに、じんと痺れるような感触が腰の後ろを通って頭へと這い上がるのを彼女は感じていた。彼の血で強制的に発情状態に追いやられている今の彼女にとって、それが快樂の兆しであることを否定することは出来そうになかった。

そんな彼女の尻穴を、詠司はほぐしながら次々と太い指を入れていった。

「……ん……くう……」

丸めた布団の上に腹ばいの格好で寝かされた少女は、腰をぴんと後ろに突き出した格好のまま必死に姿勢を崩さないように堪えている。身体にほとんど力が入らない今の彼女にとって腰を浮かせ続けるのはかなりつらい体勢だが、そうしないとまったく酷いことになるため仕方ないのだ。

今、彼女の尻穴には詠司の指が二本突き刺さっている。彼の人差し指と中指は根元まで深々と突き刺さり、ノワールの腸内を抉っている。つい先程まで小指一本をねじ込まれるだけで圧迫感を感じていたはずの穴が、男根よりは細いとはいえ指二本を易々と呑み込むまでに拡張されてしまっている。そのことに対して絶望を覚えるだけの余裕は、今の彼女にはない。

何しろ、深々と突き刺さった二本の指は彼女が尻を突き出さないと届かない高さに固定されているのだ。仮に今必死に尻を突き出しているノワールが姿勢を崩せば、詠司の指は

彼女の腸内を激しく抉ることになるだろう。

もちろん、尻を自ら差し出すかのようなこんな格好をするのは恥ずかしいことこの上ないのだが、姿勢を崩してしまつた時の恐怖を想像すると必死で耐えるしかない。

「……………ふ……………ふあ……………」

額から汗を流しながら必死に尻を高く掲げるノワールだが、既に限界が近いのか腕がぶるぶると震えている。当然、突き出した尻も微動だにせずというわけにはいかず、わずかずつだが動いてしまつている。そのわずかな動きにより、少女の腸内は深々と突き刺された指で擦り立てられてしまうのだ。皮肉なことに、彼女自身が自らの尻穴に程よい刺激を与えるように調節する役目を負つてしまつていた。

「……………うああ……………あふ……………い、いい……………」

指を二本も突き刺されたのは苦しかったが、それもしばらくすれば慣れるのが当然だ。そして一度その圧迫感に慣れてしまえば、ゆるゆると腸内をわずかに擦られる感触は苦痛ではない。それどころか、擦れた部分が次第に熱を持ち始め、不思議なもどかしさが腰の辺りに溜まつてゆく。

熱くなつているのは頭の方もだった。ノワールは熱を出したように頭がぼうつとするのを感じている。朦朧とする意識の中、腰に溜まつたもどかしさに堪え切れなくなり、とうとう……………。

「ふあああん」

ほんのわずかではあるが、くいつと腰を揺すつてしまう。突き刺さったままの詠司の指が肛内を擦り、ノワールは嬌声を上げた。

「あふ、ふあ、ひああああつ！」

その刺激に反応して更に腰が勝手に動き、結果としてまるで自ら詠司の指に尻穴を擦り付けるような動作をしてしまう。否、まるでというよりもそれそのものだった。今の彼女は、彼の指を使って尻穴オナニーをしているのも同然だ。

「こ、こんな……お尻の穴なのに……ふあああ！　腰が、腰が止まらない。あ、だ、だめ……イクッ！」

自ら腰を振って不浄の穴で快楽を得ていることを自覚し恥ずかしさを感じるノワールだが、その羞恥や背徳感ももはや彼女を興奮させるスパイスでしかない。カクカクと振り乱される腰の動きが最高潮になり、彼女は絶頂への秒読みに入った。

その様子を手だけ差し出しながら見ていた詠司は、絶好のタイミングで指を回転させて彼女の腸内を激しく擦り立てた。自らの腰の動きと合わせるように動かされた彼の指に、彼女は堪らず絶頂に追いやられる。

「あひっ!?　ひああああ——っ！」

腰をピンと伸ばし甲高い嬌声を上げながら、黒の吸血姫は激しく達した。一瞬の硬直か

らビクビクと身体を痙攣させた後、彼女の身体はガクツとベッドの上に崩れ落ちた。

「ひあっ!？」

当然、崩れ落ちるのと同時に尻穴に突き刺さったままだった詠司の指に腸内を抉られ、短時間で二度目の絶頂に打ち上げられてしまう。

「~~~~っ!」

イキながら更に頂点を極める激しい快感に、ノワールは声を出すことも出来ずに身を震わせた。股座から大量の蜜を溢れさせながら、白い肢体を横たえる黒の吸血姫。その肛門は男の指で拡張されて開かれ、ピンクの肛内を覗かせている。幼げな容姿と裏腹のいやらしい尻穴に、彼はごくりと唾を呑み込んだ。

今を逃せば、きつともう二度とこれを味わう機会は訪れないだろう。そう考えた彼は手早く服を脱ぎ捨て、丸めた布団の上に突っ伏している彼女の腰を両手で掴むと、怒張を彼女の肛門にぴとりと当てた。

「ふえ？ な、何を……?」

肛門に感じた熱い感触に、ぐったりしていたノワールも身を起こして身体を捻るように自らの尻に起ころうとしている事態を視認する。そこには、今にも彼女の儂げな菊華きくかを蹂躪しようとする恐ろしい肉棒の姿があった。

彼女は顔を蒼ざめさせ、詠司を止めようとする。

「なっ!! や、やめ……ひぐう!!」

制止の声は最後まで発せられることはなく、その代わりに侵入を始めた男根による苦悶の聲が上がった。

「あぐううう、く、苦しい。無理、無理よそんなの……」

指で拡張されて広げられたとはいえ、詠司のモノは指二本よりも太い。太い肉棒は口をキツク食い縛る肛門に中々入っていきせず、ノワールも引き裂かれるような苦痛に悲鳴を上げた。

「そのまま挿入することを諦めた彼は、代わりとばかりに肛門の下に見えるぬかるみに矛盾先を変えて突き入れる。

「あううっ!! そ、そんないきなり……っ!」

秘裂は肛門とは異なりすんなりと彼のモノを迎え入れる。いきなり奥まで突き入れたというのに苦痛はなく、感じているのは快感だけのようだ。散々開発されてきた卑猥な穴は、悦んで彼の肉棒を咥え込む。

しかし、詠司は何も責めるつもりで挿入したわけではない。男根を数度往復させると、あつさりと秘裂から抜いてしまった。

「ふえ!! ど、どうして?」

じゅぽんと音を立てて引き抜かれる肉棒に、思わずノワールは物欲しげな視線を向けて

しまう。それは控え目に言っても挿入を欲しているようにしか見えなかった。

しかし、抜かれたモノは彼女の懇願に応えて秘裂に戻ることはなく、先程入り込めなかつた尻穴へと再挑戦を図った。

「ひ、ひい……また!!」

先程と同じように肛内の肉を掻き分けて奥に進もうとする詠司。

強烈な抵抗は先程と何も変わらないが、秘裂を満たす蜜でベツトリと濡れた肉棒はそれを潤滑油として奥へと入り込んでゆく。彼はそのため彼女の前の穴に挿入したので。

上下左右から挟み込もうとしてくる肉の門を掻き分けるようにして潜入する詠司のモノは、とうとうその一番太い雁の部分^なを肛内に侵入させることに成功する。一度入口さえ通り抜けてしまえば腸内^かは前の穴よりも広く、詠司のものは根元まで彼女の尻穴に埋まってしまった。

「う、うあああ……入ってる、こんな太いのが。お、お願い。動かないで」

ノワールは動かないように懇願したが、実際のところ彼の方も彼女の尻穴にギッチリと固定されてしまって自由に腰を動かすことが出来ずにいた。ここで力尽くで強引に動かしただとしても、おそらく彼女は激痛しか感じないだろう。彼としても、別に彼女を苦しめるのが目的というわけではない。詠司はそのまましばらく動かずに、彼女が落ち着くのを待つことにする。

数分後、苦しげだったノワールの呼吸は大分落ち着きを取り戻してきていた。詠司は彼女が息を吐いたタイミングで締め付けがほんの少しだけ軽くなるのを感じ、数度様子を見てタイミングを覚えてから彼女が息を吐いた瞬間に思い切つて腰を引いた。

「あふうんっ!! う、動かないでつて言ったのに」

「ずっとこうしてるわけにもいかないだろ」

「そ、それはそうだけど……抜いてくれれば済む話でしょ」

「ああ、抜かせてもらおうよ」

「え?」

詠司はそう言うと、ゆるゆると引き抜いていた肉棒を止め、逆に体重を掛けて奥へと突き入れた。抜くという言葉とは正反対の行動に、ノワールは抗議の声を上げる。

「あぐうううう、抜いてくれるんじゃないの!?!」

「一発抜かせてもらおうつて言っただろ?」

「わ、私はそんな意味で言ったんじゃない……あくう!!」

軽口と共に、再び抜いてそして突き刺す。抜く時はゆっくり、入れる時は一気に奥まで、かんきゅう緩急付けた前後運動に、いつしか彼女も合わせるように腰を動かし始めた。もつとも、

彼女は自分が腰を動かしていることに気付いていないが。

「あ、あ、あ、おかしい、おかしいわ」

「何がだ？」

「こんな、お尻でなんて……どうして」

尻穴で快樂を得てしまっていることに戸惑う吸血姫。それを聞いた詠司はクスリと笑って腰を止めた。

「尻穴が気持ちいいのが、そんなに不思議なのか？ お前が尻穴で感じる変態だっていうだけのことじゃないか？」

「ち、違うわ……私は変態なんかじゃ！」

「それなら、どうして腰を振ってるんだ？ 俺はもう動かしていないぞ？」

「あ……」

詠司の言う通り彼は腰を動かしていない。動いているのはノワールの方だ。いつの間にか、彼女は自ら腰を振って快樂を貪っている。その事実を自覚しながら、それでも彼女は腰を止めることが出来なかった。

なお、実際のところ彼女が感じてしまっているのは別に肛虐趣味というわけではない。詠司の男根から出ている先走り汗に含まれた魔力に当てられてしまっているだけである。彼のそれは精液そのものよりは薄いものの血と同じように魔力を含んでおり、吸血鬼を悦楽へと陥れる。

しかし、彼女はそのことに気付いていないため、自分が尻穴で感じる変態になってしま

つたと本気で考えていた。

「止められない、止められないのよ。こんな、こんな恥ずかしいのに。お尻……お尻が気持ちいいの……」

「やつと認めたか。それじゃ、そろそろラストスパートといこう」

これまで腰を止めていた詠司が、ノワールの腰を掴んで再び動かし始めた。それも、先程までよりも激しい動きだ。尻穴快楽を自覚してしまった彼女は、もはやそれからもたらされる絶頂を避けることが出来なかった。

「あひゃあああああ、は、激しい!? こんな無理、こんなのもう耐えられない。イクッ、イクイクイクイク、イチちゃう!」

「ああ、俺も出るっ!」

「っ!? ひあああああああああつああ——っ!」

ギリギリのところ、腸内を抉りながら引き抜かれた男根から熱い精液が放たれ、彼女の尻へと降り注いでいく。ノワールは尻肌を感じる熱さを受けて、ダメ押しとばかりに激しく身を打ち震わせながら絶頂に達した。

かなりの時間痙攣を続けた彼女は、そのまま白目を剥いて気絶してしまい、ベッドに前のめりに倒れ込んだ。



第七章 心通わせて

「……ん……う……」

明け方、ベッドの上でうつ伏せに寝ていたノワールは目を醒ました。

ルージェとやりあった洋館から詠司の部屋へ帰り着いた彼女は、そのままベッドに倒れ込んで寝てしまっていたのだ。性的な拷問で散々責め立てられて身も心も疲弊した彼女の体力は、部屋まで辿り着けたのが奇跡と言えるくらいに限界ギリギリだった。引き裂かれた黒いドレスの代わりとしてルージェから奪い取ったサイズの合わない紅いドレスも着たままの状態だ。

「ああ……あのまま寝ちゃったのね」

ノワールが横を見ると、詠司が同じようにうつ伏せになって眠っていた。彼女は彼を起こさないように気を付けながら、ベッドから起き上がってバスルームの方に向かう。

散々垂れ流した汗や愛液が渴き、体中がベトベトになってしまっている。昨晩はそんなことを気にする余裕もなく寝てしまったが、起きて改めて見ると気持ち悪くて仕方なく、一刻も早く洗い流したかった。

脱衣所はないため廊下で紅いドレスを脱ぎ捨て、バスルームに入ってシャワーを流す。



本当は溜めたお湯に浸かりたかったが、今は汚れを洗い流す方を優先だ。シャンプーも後回しに取りあえずお湯だけで髪を梳くように洗い、続いて全身を流してゆく。

「痛っ!?!」

ふと、胸の先端から軽い痛みを感じてノワールは小さな悲鳴を上げた。見るとそこには、昨晚ルージェに付けられたピアスがそのまま刺さっている。まだ新しい傷にお湯が当たり、沁みるような痛みを感じてしまう。

「そう言えば、これ外してなかったわね……」

ルージェとの形勢逆転後は彼女を責め立てることを優先していたので、ピアスは嵌めっぱなしになっていた。部屋に帰ってきてからもそのまま眠ってしまったって、外すのを忘れていたのだ。

ノワールはシャワーを一旦止めると、浴槽の縁かちに腰掛けてピアスを外しに掛かった。

「ん……んく……っ!」

ピアスは針を反対側の留め具に押し込んで止めるオーソドックスな物だったが、これを外すには再度かなり強い力で押し込む必要がある。しかし、問題なのは今ピアスの針が刺さっているのが敏感な乳首や陰核ということだ。外すために力を入れれば当然それらの突起を刺激してしまうことになる。

胸から走る軽い痛みとそれに勝る電流のような快感に、ノワールは指が震えてしまって

力を入れることが出来ずにいた。

「あ、ん……くふっ！ だめ、外さないといけないのに」

いつの間にか彼女の手は、ピアスの針を外すためというよりは、リングを押ししたり引っ張ったりして乳首を弄るために動いていた。

「ひ、ん……あ、ああ……これ、すごい……」

乳首だけに飽き足らず、ノワールは股間の方へも手を伸ばし始めてしまった。陰核に突き刺さったリングを引っ張って、ピアスオナニーに没頭する。

秘裂からは蜜が溢れ、洗い流した内腿を濡らしてゆく。

「あ、あ、だめ、イクッ!? ひっああああ——っ!」

右手で陰核、左手で乳首を貫いているピアスをそれぞれ引っ張り、ノワールは嬌声を上げながら激しく達した。股間から噴き出した蜜が浴槽の中に流れ込む。やがて痙攣が収まったと同時に淫欲に支配されていた頭も冷静さを取り戻し、彼女は途端に自己嫌悪に陥った。

「はあ……はあ……ああ、もう。私、何やってるのかしら……」

「ホントに、何やってるんだ?」

「ひやうっ!」

自嘲気味の呟きに後ろから声が返ってきたため、ノワールは飛び上がって驚く。慌てて

後ろを振り返ると、気付かぬうちにバスルームのドアが開いており、そこから詠司が顔を覗かせていた。

「ちょ、ちよつと詠司!? 人がお風呂に入っている時に入ってこないで!」

「吸血鬼の世界だと、ピアスでオナニーすることを風呂に入るって言うのか?」

「~~~~っ! ち、違うのよ、これは違うのっ! ピアスを外そうと思っただけど、外れなくて……」

覗き行為を働いた詠司にノワールが怒りを露わにするが、自慰に耽っていたところを見られているため突っ込まれると途端に答えられなくなってしまう。彼には以前にも自慰姿を見られているため今更という感もあるが、だからと言って恥ずかしさがなくなるというわけではない。

少女は顔を真っ赤に染めながら何とか誤魔化そうとするが、あれだけしつかりと見られてしまっただけは無駄な努力だろう。

「自力で外せないなら、外してやろうか」

「え?」

彼の思わぬ提案に、あたふたと慌てていたノワールの動きが止まった。外そうと奮闘しているうちに感じてしまっただけでオナニーに突入してしまっただけで、それがなくても自分で外すのは結構大変だったためだ。第三者が外してくれるなら、その方が確実だろう。

もちろん、恥ずかしいところを見られてしまうという問題はあるが、彼に身体を見られるのは今更だった。

「そうね。それじゃあ、お願いしていい？」

「ああ、任せてくれ」

十 十 十

バスルームでは転んだりして危ないということで、二人はベッドまで戻った。

詠司は服を着ているが、ノワールはシャワーを浴びていた時のまま全裸でベッドに身体を投げ出している。明るい部屋でないと細かい作業は難しいということ、灯りを点けた部屋のベッドの上で身体を開いたが、いざ横になってみると羞恥で逃げ出したい気持ちで一杯だった。

そんな彼女の葛藤を知ってか知らずか、彼は彼女の股間のピアスを弄ぶように弄り始めた。両足を開いて秘部を剥き出しにした上に、股間に顔を近付けて凝視されながら最も敏感な陰核に刺さったピアスを弄られる。恥ずかしくて頭が沸騰しそうになりながらも、ノワールは陰核から腰の後ろを通って背中を駆け上がる痺れるような感触に、どうしようもなく感じてしまう。

「ひああああ、は、早く外して！ あ、あ、だめ！ そんなに弄られたらまたっ！」

「うーん、中々取れないな」

「し、しらじらしいことを……っ！ 遊んでないで真面目にやって！ ひ、うう……イ、イッチやいそう！」

調子に乗って股間のものだけでなく乳首に付けられたピアスまで引っ張り出す詠司。あからさまに外すためではなく自身をいじめるために弄っている彼に、ノワールは憤りを露わにする。しかし、そんな怒りもピアスをくいつくいつと引かれると腰が抜けそうな快感の前に霧散してしまふ。

「もうだめっ！ イクッ！」

「よし、取れたぞ」

「……………ふえ？」

ノワールが絶頂を迎えようとしたその瞬間、これまでの苦勞が嘘のようにたやすく陰核のピアスが外された。続いて、両乳首に嵌められたものもササッと素早く外されてしまふ。

「あ、そんな……」

刺激が途絶え、絶頂寸前でお預けにされることになったノワールは身体の中で渦巻くもどかしさに切ない声を上げた。堪らず腰をくいつくいつと振ってしまふが、詠司はそんな彼女の痴態には構わず外したピアスを置くために立ち上がってしまう。

置いていかれそうな心細さに、ノワールは泣きそうになりながら止めようとする。

「ま、待って」

「ん？ どうかしたのか、ノワール？」

「さっきのでイケなくて切ないの。だから……して、ほしい」

顔を羞恥で真っ赤に染めながらおねだりをする黒の吸血姫。しかし、詠司はそんな懇願に首を傾げてしらばっくれる。

「何を？」

「つもう！ 意地悪ね、分かってるんでしよう？ 貴方のモノをあそこに挿入れてほしいって言ってるの！」

「本当はもつといやらしくおねだりさせたいところだけど、これ以上焦らすのも可哀相かな」

詠司はそう言うと、着ていた服を脱ぎ捨てた。仰向けに横たわるノワールの上に伸し掛かるようにして、男根を彼女の秘裂に宛がう。

すると、少女が提案をしてきた。

「あ、それと一つお願いがあるの」

「お願い？」

「今日は最後まで抜かないで……その、腔内なに出してほしいの」

「え？　でも、それってヤバいんじゃないのか？」

「ルージェだつて死んだり発狂したりしてなかつたから、大丈夫よ」

腔内射精をおねだりするノワールに、詠司は驚く。魔力が強過ぎて影響が読めないため、腔内には出すなど言われていたためだ。しかし、同格のルージェがそこまで酷いことにはなっていないかつたため大丈夫だろうと彼女は踏んでいた。

「あの女が貴方に腔内に出されてるの……ちよつとだけ羨ましかった。魔力は確かにキツいかも知れないけれど、私もしてほしいの。だから、お願い」

「分かつた」

そこまで言われれば、彼の方に否はない。了承と共に腰を押し進める。

「あああああ、入ってくる！　お、大きい……それに、凄く熱い」

「大丈夫か？」

「今日は随分と優しいのね。大丈夫だから貴方の思い通りに動いて」

ルージェの責めで散々犯されたものの、それは機械によるものだった。物言わぬ淫具にはない肉棒の熱に、ノワールは身体のうちから灼かれるような悦楽を感じている。

詠司が腰を動かし始めると、その熱は収まるどころか更に熱くなっていった。元より絶頂寸前だったノワールは、あつと言う間に追い詰められてしまう。

「あううう、すごい、あ、あ、あ、ダメ！　イクッ！　ひううううううううっ！」

「え？ もうイッたのか？」

「うう、ごめんなさい。でも、詠司があんな風に焦らすから……もう限界だったのよ。本当は一緒にイキたかったのだけど」

自分だけあっさりと達してしまったことに、ノワールは恥ずかしくも申し訳ない気持ちで俯く。詠司よりも先に絶頂に達してしまうことはこれまで何度もあったので今更という気もするが、今日は恋人っぽく優しく抱いてくれているので一緒にイキたかった。

「ごめん、我慢出来そうにない」

「え？ ひああああああっ!? ま、待って……今、イッたばかりだから敏感になつて！ お、お願い……少し休ませて！」

「無理だ。そんな可愛らしいこと言われたら、もう抑えが利かない！」

「も、もう……仕方ないわね」

絶頂に達したばかりの敏感な膣内を激しく擦られ、ノワールは悲鳴を上げた。しかし、同時にそれだけ求められていることを嬉しく感じてしまい、詠司を本気で止める気が失せてしまう。それどころか、両足を彼の腰に回して抜き差しを余すことなく受け入れる格好になった。

「いいわよ、貴方の好きにして。激しく突いて、私のを掻き回して」

「ああ！」

詠司は激しい腰使いでノワールの秘裂を突きまくった。

ルージェの拷問で散々にいたぶられたにもかかわらず、彼女のあそこは処女の時とほとんど変わらない締め付けでそんな彼の物を迎え撃つ。

「あああああ、すごい！ 奥まで来てる！ こんな無理、堪えられない！ イクの我慢出来ない……っ！」

「我慢なんてしないでいい。何度でもイカせてやるさ！」

「ホント!? 嬉しい！ あ、きた！ イク、イクイク！ ああああああ——っ！」

詠司の激しい突き込みに、あつさりと二度目の絶頂へと旅立つノワール。しかし、彼の腰が止まらないため更に追い打ちを掛けられてしまう。

「そ、そんな！ イッてるのに！ イッてるのに！ もっと大きいのが来そう！ すごい来る、すごい来ちゃうの……っ！」

「こっちもそろそろだ」

「うん！ 腔内に、腔内にちょうだい！ あひ、いぐ、うあ、くううううっ！」

腰の奥のざわつく感触に、彼もそろそろ限界を悟った。その宣言に、ノワールは改めて腔内射精をおねだりする。

「いくぞ！」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

夢幻姫姫
S.E.V.N

とろ蜜美女めぐりの
桃色バスツアー

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説レーベル！

リアルドリーム文庫

戦うヒロインを屈辱させてあげる
かなり過激な
陵辱系ライトノベル！

フリリダム120%!?
ジャンルにこだわらない
ドキドキラブ！

呪詛喰らい師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

二次元ぷち文庫

新装版
姫騎士

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍しかなかったらチラチラ

姫騎士 クラズメイト!

ビギニングノベルズ

小説家になろうの男性向けサイト
「アケタイン」ノベルズ
から書籍化！

二次元ドリーム文庫

異世界
で生きる
妹は
ウマい？

ドキドキラブな
ハーレム系
ライトノベル！